

# 1年生学年だより

平成 27 (2015) 年 9 月 29 日 (火)

第 33 号

吹田市立第二中学校第一学年

## タイムくん と ドリルノート

二中の1年生は、タイムくんとドリルノートに取り組んでいます。最近、朝礼の様子をのぞいてみると「先生！タイムくんまだできていません」とか「ドリルノート今日中でいいですか」とかいふセリフがけっこう飛び交っていることに気がつきます。中には「忘れたから、もうあきらめるわ」なんていうことを言う人も出てきています。

先生達は、意味のないことや、みなさんに役立たないことを、日常生活に組み込むことはありません。もちろん「苦しめてやろう」なんていうイジワルな気持ちもありません。

必ず意味があるのです。毎日取り組むことで、コツコツ取り組むことで、成果があがってきます。

湯のみにお茶を注ぐ様子をイメージしてください。お茶をどんどん入れていくと、どうなりますか？湯のみの縁を越えた瞬間、あふれ出します。

学力も同じです。毎日コツコツためていくと、ある日突然あふれてくるのです。あふれ出てくる学力を感じたとき、それはどれほどの快感でしょうか。もっと難しいことに挑戦したくもなり、自分が高まっていきます。

文化祭が終わり、体育祭まで、いったん通常の生活に戻ります。この通信に示した資料をよく読んで、タイムくんやドリルノートに取り組む意味を、今一度考えて欲しいと思います。

国立教育政策研究所は、平成 25 年度全国学力・学習状況調査（全国学力テスト）の実施報告を公表した。見通し・振り返り学習活動や言語活動を積極的に行った学校ほど記述式問題の成績が良いことが明らかになった。クロス集計では、教科に関する調査と質問紙調査を組み合わせる集計を行い、学校の指導状況と学力の関係を分析した。分析の結果、「授業の冒頭で目標を示す活動」「授業の最後に学習したことを振り返る活動」「学級やグループで話し合う活動」を積極的に行った学校ほど教科の平均正答率が高く、特に活用に関して問う B 問題の記述式問題の成績が良かった。

しかし、学校がこれらの見通し・振り返り学習活動や言語活動を行っていると考えていても、そのように受け取っていない生徒が存在し、意識の差がみられた。特に中学校ではその差は大きい。

学習習慣については、テストの間違いを振り返って学習するなど「学習方法に関する指導」や、家庭での学習方法について具体例を挙げながら教えるなど「家庭学習に関する指導」「総合的な学習の時間における探究活動」を行った学校ほど子どもの家庭学習習慣が身に付いている傾向がみられた。

**記憶のメカニズム** 記憶には短期記憶、中期記憶、長期記憶の3種類がある。試験に生きる記憶は長期記憶であるので、いかにして長期記憶を作るか。すなわち記憶を如何に長期記憶に育てるかが大切である。このためにも、記憶のメカニズムを知ることが大切なことであろう。見たこと、聞いたことは、ほんの一瞬で忘れてしまう。これらのうち、とりあえずは必要だと判断されたこと、興味があることなどは短期記憶に入れられる。短期記憶に入れられたもののうち、とりわけ興味を持ったり、理解したことは中期記憶に入れられる。中期記憶は脳内の「海馬（かいば）」にて、最大1ヶ月程度保持される。この間に不要なものと長期記憶に入れるものが選別されることになる。いわば、長期記憶を作るかどうかの判定場所である。では、どうすれば長期記憶に入れられるのだろうか？それは中期記憶に留まっている間に複数回反復することである。複数回記憶にアクセスされれば、その記憶は重要なものとされ、側頭葉に送られて長期記憶となるのである。

